CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Barrel

世界に於ける資源の爭奪

苫米地英俊

一

戰雲霽れて玆に拾餘年、北邊の一隅を除く總ての世界は時の經過に伴れてその現實の姿を吾人の目前に展開し來つた。見渡す限り不況の寒風に吹を捲られながらも悉く平和を讃美する春の裝をしてゐる。國際平和を表象する殿堂は幾つも裝美に建てられ、近い將來にも亦更に建設の計劃が熟して居り、譬ひそこ〻に建築中ばで壞れ落ちた淋しき廢墟にも彷彿する殘骸を認むるにもせよ、人類は新しい世界に理想の一階段を踏み登つたやうにも見える。

華府會議の大建物であつたヒューズ氏が賣物にした公明正大が近頃ヤードリ氏の「アメリカン・ブラツク・チエンバ」の投げた一石に木端微塵に打壞されたのを見て世間は驚異の眼を睜つて恰も天使の地上墜落を目擊した感をなしてゐる。併し彼の身邊に漲る石油の嗅を知るものには寧ろ當然過ぎる程當然の行爲で今更從らにセンセイションを捲き起す世間の鈍感さに驚かされる位のものであらう。

ヴエルサイユの平和會議以後に頻繁に開催せられた國際會議の舞臺劇は悉く高い理想を外題とした出物あるが作者の狙ひ處は常に商權の樹立と資源の爭奪とに過ぎぬもので、資本帝國主義的侵略の坦路開鑿を國際平和の美名に隱れて折衝し、戰はずして敵を制する遠謀に外ならなかつたかに見える。恁した會議を經る毎に我國は或は小利を得てゐるかも知れないが大局に於ては手を縛られ足を束ねられて世界の潮流に漂ふ捨小舟にされ

る感がなきにしもあらずである。而も我國はこの潮流に掉し出來得る限り善處する外に選ぶべき道がない。辛苦の中に志を立て光明を失はぬ心掛が肝腎である、徒に理想の歌に躍り空論に現世を忘れぬ覺悟が必要ではあるまいか。然るに我國の拂ふ犧牲の大なるにつれ、大聲をもて我國の美德、國際協調の精神が列强から賞歎せられ、我國民中にもこれに和して理想の虹を謳歌し錯覺を起して眞想を見失ふさへあるらしい。

世界大戰に近親死別し、都市田畑が荒廢し、剩さへ戰後の不況生活難に四苦八苦を經驗する交戰國民が極端に戰爭を嫌惡するに不思議はない。言語に絕した凄慘の後に平和を好愛する熱情の熾烈なることは蓋し自然といふべきであらう。この眞情から吐露せられる平和の聲に嘘や僞を宿す餘地のあらう筈がないことは知れ切つてゐるが、現世に響き渡る平和の叫びが悉く神の聲であると誰が斷言し得やう。而かも眞情は常に囁き僞善は叫ぶ。囁は微風に漂ひ、驅道を孕む僞善は全世界を振はす。

こゝこ吾人の見遁し得ないのは平和の叫びと共に戰後鬪爭精神が頓に旺溢し來つたことである。階級鬪爭といひ、人種問題といひ、國家水準運動といひその名は異るも悉くこの精神の現れに外ならぬ。而かも資本帝國主義は戰後彌々强烈にして辛辣さを加へてゐる。さればこそ軍備比率乃至制限問題は果して平和の爲めなりやの反問が出る譯である。斯くて國際政情は極端に不安となり、相互の信賴を缺き、戰後の恢復は容易ならず不況は彌々深刻化して來てゐる。

最近に於ける獨逸財界の危機、英國財政の混亂等何れも單純なる經濟問題視するを許さない。不信不安の政

情に由る正貨流失は英蘭銀行の金利引上げに依て停止する筈がない。政情不安と鬪爭精神との存續する限り世界經濟の立て直しは蓋し難中の至難であらう。

二

産業に立脚して觀察するとき前世紀と今世紀との間に著しき相違を見出す。動力の推移がこれである。二十世紀に及んで石炭の勢力が衰へ石油水力電氣がこれに代つた。蒸汽と瓦斯とが十九世紀文明を飾り、その進歩を促したとするならば、今世紀は石油と電氣とに依てその文明の態形を變へ進歩の速度をめまぐるしきまでに高めたといひ得る。

この態形の變化、産業軌道の轉變は現時不況の一重大原因をなすといふて大過あるまい。人絹の出現が紡績工場の浮沈轉換を餘儀なからしめ、自動車の普及は汽車・レール製造業に失業者を生じ、鐵道經營を困難に陷らしめ、鐵道の電化、汽船軍艦の石油化は炭礦業に痛棒を喰らはさせてゐる。近時正貨が航空輸送に委せられてゐるなども一例で大小數限りなき産業軌道の轉換の爲めに必然的に資本に無駄を生じ失業の慘苦を産むに至り、而かもその落付場所は容易に到達し得ない狀態にある。併しこの原因に由る不況は時日の經過に依て當然解決せらるべき性質のものであるに拘らず容易にその歸結を見ないのは前に述べた國際政情の不安、相互信頼の缺乏、鬪爭精神の活躍の所爲でなければならぬ。

鬪爭に依て平和安住を求めんとするは木に緣て魚を求むるにも增して困難である。愛と信と協調とをよそにしてこれらは決して得らるべきものでない。若し鬪爭に依て得られたとするならばそれは勝者限りの平和であり、且つ勝者と雖どもこの場合安住は得られない。階級鬪爭に於て勞資その所を異にすることはあり得やう、併しこれに依て萬人が平和安住を得ることは不可能と斷ぜざるを得ぬ。國際關係に於ても同一のことがいへる。然るに政治的、社會的、經濟的國際不平等が戰後益々顯著に赴き、從て國際階級鬪爭精神とも稱すべきものが熾烈さを加へて來てゐる。一社會に於て權力・資本階級が事每に階級鬪爭心を煽ることを敢てするが如くに國際的權力・資本階級も他國の鬪爭心を唆りつゝある。人類、資本、物貨の自由移動を阻害し、資源の獲得、市場の獨專に腐心し、順調なる產業の推移、經濟財政の恢復を益々困難ならしめ、國際貧富の懸隔を彌々大ならしめてゐる。

恁した他の利害を顧ない獨專政策は限られたる期間或る一國を裕福ならしめ得るかも知れぬが結局その國々へも惡影響をもたらす許りでなく人類全體の向上、福趾の增進を妨げるものである。段鑑遠からず米國にその例を見る。一九二九年の夏迄米國は所謂萬年景氣を經驗し他國を超越して米國のみが獨り繁榮を專らにし得ると少くとも大多數の米人は確信してゐた。戰時より十五ケ年の間軍需品の供給、復興材料の賣込、資本の輸出等に依て想像も及ばぬ巨利を博し、生產資本はいやが上にも蓄積せられ、生產額も亦著しく增加したが、それ等は忽に市場に吸收消化された。斯く景氣の旺なる頃は一般消費力も製造工業の隆盛に伴つて際限なく伸展す

るかの如き觀を呈したが、現實はこれに反して增加せるものは國內消費に限られ、海外市場は打續く不況に呻吟してゐた。只僅かに米國の好況のおかげで各國は原料品の輸出が出來たので凌ぎをつけ得たのであつた。事情が斯の如くであつたから原料生產國の生產は何れも增加した。現に我國に於も生絲の產出高が昭和三年と四年とで三萬キロ增加して居り、昨年は一昨年に比して十萬梱も多かつたとのことである。

物の賣れる限りは何處までも生產が膨脹する、そしてそれにつれて金利が上る。如何に資本の豐富な國家でもこれに例外は需められない。金利は生產を制限するから營利事業には一定の限度なきを得ない。米國に於てこの限度が達せられたのが一九二九年の秋であつた。一度金利高に生產が引合はなくなると生產に制限が起り、資本に對する需要が先づ減退し、金が動かなくなるから物價が低落の途を辿り、次で失業者が續出して來る。こゝに及んでは人爲的消費奬勵策など全く何の効果をも示すものでない。米國の萬年景氣はかくの如くして急轉直下不況の底に陷落し、原料品の輸入は頓に激減した。その爲めに原料生產國は非常な窮地に陷つた。それら各國の不況は直接に工業國英國に反影し忽ちにその失業者を倍加した。元來英國品の五分の三は原料生產國へ輸出されるものであるからこの場合に打擊を受けることが他よりも甚しかつた譯である。獨逸はその製品の四分の三が歐洲諸國に輸出せられるものである所から原料品の下落に依て寧ろ好景氣を示した。併しこれも一炊の夢の間に過ぎて漸次世界的不況の影響を受け、更に戰債問題、政情の不安、信賴の缺乏等から正貨の海外遁避となり近時の財界危機を惹起した。

序上の事實は如實に國際協調の必要を吾人に指示してゐるものであるが、現狀を見ると移民制限、關稅障壁、國際政情の不安、相互信賴の缺乏等の爲めに物貨の移動は阻止せられ、資本の經濟的流動は妨害せられ、而かも經濟的原因によらない戰債支拂の爲めに經濟界が攪亂され、世界的不況は爲めに不自然に長引かされ、國際鬪爭心は尖鋭化し、列國は平和協調の道から遠ざかり行く。この現實の前に外交辭禮や、軍備制限が果して幾何の價値を有するものか。大戰の餘禍未だ去り難く、產業軌道の轉換未だその落付を得られぬさへ現代人の不幸であるに、羈道の過去の夢未だ醒めやらず二十世紀產業の鍵を握らんとして資源爭奪に火花を散し、世を擧げて階級鬪爭より民族鬪爭の道を急いでゐる。

理想は理想にして現實にあらず、徒に理想の影を追ふものは現實に破る。

三

T・T・リードに依れば一噸の石炭はよく千一百人の仕事をなすといふ。O・E・ベーカに依れば四十エーカーの土地を六吋の深さに耕すには五萬噸の土を堀返さねばならぬ。今假に人力を以てすれば十八ケ月を要し、馬匹を使用すれば百六十五時間を要し、耕作自動車を利用すれば僅々四十時間を以て足るといふ。こゝに見る小型移動性を備へる機械がこの世紀に於ける特異的のものであり、これによつて產業革命は英國十八世紀のそれに比して幾倍かの高速力で吾人の目前に展開されて行く。

鋼鐵一噸を製するには四噸の石炭を消費する。併し鋼鐵は能く磨損に堪ふるに反し、消費された燃料は永久に歸らない。重要さに於て燃料が鐵鋼に優る所以は實にこゝにある。鐵石炭が前世紀産業の核心をなしたが、今世紀に及んで鐵は依無としてその重要さを保持してゐるに引換へ、石炭の地位は大に動搖し、遂に石油にその首位を讓ることになつた。その原因を尋ぬるに第一に石油は高熱量を有し且つ貯藏に便である。英國海軍用標準燃料油と石炭とを比較するに英熱量單位で前者は噸當り一萬九千五百單位なるに對し後者は一萬四千五百單位である(註)。而かも石油は空間を占むることが少く、且つ石炭の如く機關に接近して貯藏するを要しない。第二に能率が總合的に高い。石油機關は技術を要しないで平均せる高速度を出し得、清潔を保ち衞生的使用が可能なる上に、ボイラ、床板、シヤベル、火床其他の器具に對する經費を節約し得る。第三に人件費を省き得る。一一、三二〇噸の客船では二十人を減員し得、火夫十一人で七、六〇〇噸の貨物船を運轉し、料理人一名を減員することが出來る(註)。第四に燃料積取が容易である上に時間と經費とを節約し得る。時間の節約は結果に於て船腹の增加に等しい。

註。Lahee, "Our Competitors and Markets," Report of the British Coal Commission, 1925.

石油の値段は石炭に比して稍高いけれども如上の利益はその損失を補ふて尙餘りがある。この外に更に陸海軍の策戰、武器の運用上石油は經濟を離れても無くてはならぬものになつてゐる。以上述ぶる所から丈けでも石油獨特の地歩を占むべき理由が十分であるが、自動車及び航空機の驚異的發達は石油をして益々重要ならし

むることになつた。

石油が商業的に生産され始めたのは最近のことに屬し、先づ大體一八六〇年頃と見て差支あるまい。頭初の四五十年間は燈油及び機械油の二種に限られたが現在では燃料油が五割一分、ガソリンが二割七分なるに對し燈油は僅に一割五分、機械油が六分といふ歩合に變り、用途の變遷を物語ると同時に前二者に對する需要率が急速に高まりたることを示してゐるが、この歩合は將來更に進展を見せることであらう。

世界にある自動車の總數は無慮三千五百萬臺で米國が四人に一臺、加奈陀が八人に一臺、濠州が十人に一臺、英國が三十人に一臺、佛國が三十一人に一臺であるが我國は六百九十七人に一臺といふ情ない割合となつてゐる(註)。これに依ると米國は既に飽滿の狀態に達したと見られるがその他の諸國に於ては未だ增加の餘地が十分殘されてゐると考へられる。

註。Statesman's Year Book, 1931.

航空機に就てはその數を詳にしないが現在數でも相當數に上り、將來も急激に增加するものと想像し得る。近時商業飛行が異常の發達を遂げ世界の定期航空路が十一年前に三千哩に過ぎなかつたものが、今日では十二萬五千哩に及んでゐるのみならず、その安全率が他の交通機關を凌駕する勢を示し、運輸費が低減した結果、空輸貨物が著しく增加し、正貨空輸さへ普通となり、昨年度より本年にかけ英佛間の正貨の移動は悉く空輸に依つたなどは着目を價する(註)。

註。Daily Mail Year Book, 1931.

更に驚異すべきは戰鬪機の飛躍振りに見られる。千二百馬力で一分間に千五百呎の昇登力を有し、三萬五千呎の高空を時速三百哩で航空する爆擊機があり、着彈射程距離外に悠然姿を現し、液體空氣を携帶して稀薄なる空中に長時間滯留し機會を狙つて時速六百哩で降下攻擊に移り、二萬呎の高空より空中水雷を發射し二十一哩先方にある敵を攻擊し得る空中潛行艇と稱するものが發明せられてゐるといふ(註)。

註。The Pacific Aforecast by P. T. Etherton and H. H. Tilman.

現時の戰爭に於ける空軍の威力は大戰當時と同日の談ではなくなつてゐる。航空科學の急進の前に何國と雖ども一日の苟安を許されぬ狀態になつてゐる。

世界に於て目下建造中の汽船の七割五分は石油を燃料とするもので、石炭をたく客船が太西洋上から影を沒して既に數年を經てゐる。加之、世界各地に用ひられる發動機船、發動機關車等の數も驚くべき增加率を示してゐる。この趨勢は石油の需要と油田の價値とを增さずには置かない。平時にも戰時にも重要產業の資源のないものには勝利の榮冠は來ない。總ての資源中現在に於て石油に及ぶものはない。於是、現世紀に於ける資源爭奪戰は石油を中心とする。

四

世界戰爭終了と同時に英米石油戰の幕が切つて落された。土耳古、波斯、コーカサス等の油田爭奪に血みどろになつた姿が吾人の面前に先づ展開された。英國々會議員E・G・プリツトマン氏によると戰前英國は世界油田の約二分しか所有しなかつたが、現時は世界給油高の約五割を支配するに至つたとの事である(註)。

註。一九一九年五月七日タイムス紙(倫敦)

この記事を一見してデモクラシーを確立する爲めの戰爭が英國の石油政策に如何に多くの寄與をなしたかを世人は知り得て啞然たるものがある。

世紀初めに伯林バクダツド鐵道問題が世間を騷がせたのも、土斯古を獨逸が巧に同盟側に引込れたのも、只さへ不足勝の軍隊をガリポリやメソポテーミアに英國が割いてあたら尊い青年の血で砂漠を濡したのも、その目指す所は皆一つで、油田政策の實現に外ならなかつたのである。

世界の產油額は二億一千六十五萬六千七百六十メートル噸で、六割七分强は米國で產出してゐる。これで見ると同國の產油步合が稍々減退してゐるが、これは石油政策の結果で墨國の資源涸渴に依る衰頽に因るものとは性質が全く異る。米國に次ぐ產油國はヴエネジーラであるが、その產出額は段違の一割弱で、第三位が露國の七分弱である。ヴエネジーラは戰前は產油國として知られてゐなかつたのが一九二一年以後に急激の增加率を示し、一九二七年には早くも墨國の壘を摩し、遂に現在の地位を占むるに至つた。露國は一九二三年に漸く石油礦業が緒につき戰前の約半額を產出し、その後逐年增加を示し、二六年には殆ど戰前に復し、翌二七年に

は戰前より一割以上超過し、現に世界第三位に達し緊要な財源をなしてゐる(註)。

註。産額の數字は Statesmans Year Book による。

消費の方面から觀察しても米國は第一位で世界總産量の約七割を消費してゐる(註一)。米國は國内の油田は成るべく保存して墨國その他から原油を多量に輸入し既製油として不足を補ひ又輸出してゐる。次が英國であるが輸入原油の大部分は既製油として再輸出されてゐる。その原油の四割三分は波斯から、一割三分は蘭領東印度から輸入するのが大口である。既製油の輸入は極めて少量であるが、その中ガソリンの四割七分は米國から一割六分は波斯から、七分は露國から輸入し、燃料油の四割九分は墨國から、二割四分は米國から、一割六分は露國から給供されてゐる(註二)。恁した有樣で自國の油田を持たぬため市場を動かす力がなく、世界市場は常に米國に支配され、その政策によつて値段が左右される。英國が油田政策に沒頭するのはこの不滿があるからである。

註一。Lilley, The Oil Industry.

註二。U. S. Dept. Cmmerce: Trade Information Bull. 407.

五

世界の石油産地は現在では米國を隨一とするが、その埋藏量に於ては露國は米國を凌ぐといはれて居り(註一)

波斯土耳古地方も尠くとも米國に匹敵する油量を埋藏すると稱せられてゐる(註二)。そこで戰後石油爭奪劇はこの地方を背景としたジェノア會議から說き起すことにする。

註一。Oil and Gas Journal, Tulsa, Oklahoma, Aug. 27, 1925.

註二。Foreign Ownership in the Petroleum Industry; submitted to U. S. Sanate, Washington, 1923.

この會議が開かれる迄の各國、殊に英國とそれらの地方との關係に就て先づ大略を承知しておく必要があらう。大戰に際して英國は獨逸の印度侵入防止の目的と稱して波斯油田の保護を兼ね、コーカサス油田獲得を目指して一九一四年にメソポテーミア遠征軍を起し、埃及から小亞細亞へ北進し、パレスタインの油田を手に收め一七年にはバグダツドを占領し、越えて一八年の秋にはその宿志を遂げコーカサスに國旗を立て、直ちに技師を派遣し、鐵道の修理、バーク・バートウーム油管線其他の改善を急いだ。

南露のこの地方は世界屈指の油田地で黑海に面するバートウームから裏海に臨むバークに至る間は一面に石油を湧出する。世界に油田鮮からずと雖ども、斯く集約的に油田の集合せる所は他にない。こゝが附目で英獨が近東で戰つた譯である。その間の變遷を約言すればコーカサスは帝政露國の手から一度び獨土の手に落ち、平和克復に及んで英國派遣軍の手に移り、平和會議に際してはこの地方にジョージア自由國建設の提案を英國が出したが成立に至らず、ジョージアに英國より油田を還附することになり、二一年に至つて遂に勞農露國に歸へつたのである。二二年七月十日タイムス紙上でアーサ・ムーアは「英國はバーク油田を獲得保持するために

行つたのであるが戰を賭する覺悟がなかつた」と皮肉な攻擊をしてゐる。彼のいふ戰爭は勿論赤露を相手の意であるが、英國が若し武力維持を試たとしたら、果して對露問題丈けで濟んだであらうか。

ジエノア石油爭奪劇には各國一流の巨星が登場したが中で異彩を放つたのはサー・ヘンリ・デイターディングであつた。彼は和蘭から英國に歸化した人で、フイツシヤ將軍が嘗て彼は「膽力に於ては奈翁に比すべく、智慮に於てはクロンウエルに比すべし」と激賞した程の英傑であり、ロイヤル・ダツチ會社の社長である。デ氏はコーカサスの利權掌握を劃策し、先づ彼地關係の大小石油又は油管線會社を併合して會議の地に赴き黑幕で絲をあやつゝた。

世界最大の石油會社はロイヤル・ダツチ・シエル系とスタンダード系とである。ロ社はロイヤル・ダツチ石油會社とシエル・トランスポート・アンド・トレーディング會社とが合併して持株會社となり多數の子會社をして世界各地に割據して營業をさせてゐるもので、バークの利權は一九一二年にロスチヤイルド家の持株の八割を二拾四萬一千二百二拾七磅で讓受したのに始まる。次で和蘭及び佛蘭西等から株券を買集め戰前から相當の繩張を持つてゐたが戰後はこの基礎の上に一擧全權掌握を企圖し政府の內諾後援を受けてゐた。

後者のス社はJ・D・ロツクフエラーが一八六七年に二人の組合員と共同で創立し、七〇年に資本百萬弗に增資しオハヨー洲スタンダード石油會社としたもので、爾後十年足らずで米國產油の九割乃至九割五分を支配するに至り、ルーズヴエルト大統領の有名なトラスト征伐に遭ひ、表面解體して實はニウ・ジヤーシーのス社が

持株會社となり功妙に結束して墨西哥を初め世界各地に採掘權を得、羈權をロ社と爭つてゐるが、ロ氏が如何に偉大で、ス社が如何に成功してゐるかはロ氏一代に公共の爲めに投じた金額丈けでも五億弗を超えるといふ事實一つで明かに察知せられる。このス社はコーカサス油田に着目して、一九二〇の夏ノーベル兄弟商會からその油田・權利・財産一切を讓受した。ノーベルは國籍關係の複雜した企業家で、その露國市民として有した財産は一九一八年に勞農政府が沒收し國有に移したもので、ス社は其間の事情を知りつゝ買收したもので法律上所有權の基礎が頗る怪しいものでるが、今日に至るまで尙ス社の帳簿に資産として殘つてゐる。

六

ジェノア會議は一九二二年四月十日から開かれ帝政露國の公債、露領内に有する外國人の私有財産に就て協議するのが目的であつたが、各國の大小石油王國の代表が惑星として參集し、政治家の主力も油田利權に傾倒された。

勞農代表參加の目的は國家の承認を得ること及び油田利權にからむで財政窮乏の打開策を講ずるにあつた。舊國債や私有財産問題などは初めから眼中におかなかつた。して、この問題に就ては英國は實利主義を採り佛國は原則主義に籠り、互に相讓らず、爲めに油田問題にまで累を及ぼし結局破綻に導いたのであつた。

デ氏は英政府と同一歩調をとり、對露局面打開に最も可能性があり、且つ獨占方針に添ふ極めて巧妙な策戰

計劃を立て、有名な覺書を公表した。それに依ると勞農政府は原所有者に還附し能はざる私有財産を他に讓與せずといふ原則を立て、原所有者とは勞農政府の國有法令發布前に所有權を持つてゐたものと定義した。これによると一九一八年以後の權利を認めぬことになり、ス社の權利及び巴里の株式市場でその後に取得した佛國白國筋の利權を否認排除することになる。この提案は勞農政府の主張に抵觸しないからその承認を得ることが難くない上に、英國の獨占を保證するもので、英國には最良の案である丈け、他の諸國にとつては最惡の案である。バーク油田問題はこゝに全く停頓を來した。

勞農政府の建前はどこ迄も舊公債、私有財産問題に觸れず、過去の關係を斷ち新しい立場で一切平等主義で交渉すべきであるとするに、佛白は私有財産問題にこだはり、その返還又は賠償を主張して動かない。ス社の權利主張はデ氏の案を俟たないでも根據が薄弱であるが大體の利害が一致する所から米國は會議に參加してゐないにも拘らず蔭に日向に佛白を支持して來たが今は猶豫すべきときでないと見た米國は彌々乘出して來た。米國駐伊大使チヤイルド氏は傍觀者と稱して羅馬からジェノアに出かけ、五月十一日に遂に米國最後の切札を出した。「新聞紙上の議論には誇張があると思ふが石油問題に就ては米國はその權利且つ義務として歐洲其他に於て保護を要する財産及び權利を有する米國市民を保護すべく、國内又は國際問題たるを問はず、門戸開放主義により總てに平等の權利を認めざる計劃の適用を承認し得ない」といふ聲明書を發した。

米國は國際聯盟委任統治によるメソポテーミア油田に割込の際もこの切札で成功し、英國から二割五分の利

權を割讓された。あらゆる國際問題に就て事の理非は別として戰後米國を無視して何等の決定をもなし得ないことがこれに依て如實に證明されてゐる。米大使の聲明書は會議を閉會に導いた。米國は英國の利權獲得防止をその成功と心得、他日勞農政府財政窮乏がその極に達したときに更に有利な解決を得らるゝものと誤信してゐた。

七

ジェノア會議後引續いて露領油田問題に付前哨戰が各國間に絕え間なく、約一ケ月後の六月十五日にヘーグに再び會議が開かれた。

勞農政府の建前は依然牢固として到底拔き難いものであつたが、今度は利權讓渡の用意ある油田を列擧明示し、入札によりモスコーに於て政府が決定する旨を公表した。烱眼を有するデ氏は好機逸すべからずとなし獨占計劃を犧牲にしてもこの基礎の上に利權を設定しやうとしたが、悔を後日に殘すと知らざる、遠き慮を缺く各國は擧つて反對を表明し、ジェノアの失敗を繰返へさんとした。そこで、デ氏は極力佛白の說得に務めたけれども白國は更に氣乘せず、佛國はス社を恐れて逡巡する有樣であつたが結局談が進行して勞農代表リトヴイノフ氏が七月十九日にモスコウに請訓する迄に漕ぎつけた。すると米國が復も飛出して回訓のある前日に閉會を宣せしめた。

ヘーグ會議を閉會に至らしめた米國はその筋書に從つて露油封鎖同盟をつくり、頻に「盜油不買」の宣傳に力め勞農政府を財政難に陷れんとした。併し品質の優良、市場の近接、歐洲油田の不足等の原因から露油の祕密取引が盛に行はれ、その間ロ社ス社間の暗鬪が繰返へされたのみで露油封鎖は遂に龍頭蛇尾に終つた。

於是、ス社は一飛躍を試み露油全部買受の相談を勞農政府に持込むだ。そしてロ社必死の妨害にも拘らず交渉成立の光明が見えて來た。

一九二四年に米國の產油が減退を示した。この以前から米國は墨國石田の枯渴を目前にして、自國油田に危懼を懷き始め、悲觀論が續出し、現大統領フーバ氏の如きも當時商務卿として外國利權獲得の熱心家であつたから政府もス社を極力後援し對露石油問題に乘り出した。ス社は巨額の信用引受と米國の勞農政府承認とを好餌として交渉の進展、難局の打開を試た。それが功を奏して勞農政府は產油五割をス社賣渡しに同意し、販路協定の具體案まで呈示した。かくて、一九二六年三月二十七日附紐育タイムスはス社の協定成立を報じ、翌二十八日の紙面は勞農政府承認問題で埋められ、同時に政府その他關係有力筋に向つて文書に依る運動が開始せられた。

併しこの協定成功は頭初から頗る疑問視されてゐた。その理由は、油田國有解除、私有財產還附は勞農政府の立國精神に反し自殺的行爲と見られる。然るにス社はバーク油田還附の主張を棄てず、ス社の顧問から國務卿に就任し、辭任後再びス社顧問に戻つた程の間柄であるヒューズ氏は當時國務卿として勞農政府承認の條件

として外人私有財産還附を固執してゐたからである。

恁した行き惱の最中に突如平地に波亂を起したのは彼の有名なシンクレーア氏であつた。中々識見があり、頗る目先がきく人であるが投機的で一寸油斷のならぬ企業家と目されてゐたが、從來露國油田に何等の行懸りがなく、全く白紙的立場にあるのが强味で、而もス社の好餌をその儘を提供したのであるから成功可能性は寧ろス社以上であつた。このシ氏が樺太油田に着目し、漸次シベリヤに猿臂を延ばし、東洋侵出を企劃したなどは實に遠き慮を藏したものである。當時の大統領ハーディング氏とは昵懇の間柄であり、海軍卿デンビーその他の閣僚とも亦深い仲であつた。それらの關係を相當交渉に利用したとの噂もある位で、前提たる國家承認も必ずしも不可能ではなく、二億五千萬弗融通條件も纏まり萬事滯なくすら〳〵進行した。最初の全露を包括する利權問題は甚しく縮少せられたにもせよ先づ大成功で一九二三年十一月に勞農政府は油田を、シ社は一億一千五百萬金ルーブルを出資し共同經營の契約が出來、更に他の產業に對し紐育で巨額の融通をする附帶條件で米上院議員メースン・デー氏が假契約を露都で調印した。

ス社とシ社とは從來商賣敵で內地市場は申すに及ばず到る處で衝突してゐるが、波斯油田でシ社はス社の裏をかき、又バークの利權をス社から橫奪すんとするのであるからス社は捨身でかゝり、必死の策を廻らした結果が彼の有名なテイーポット・ドーム疑獄事件であると噂されてゐる。その眞僞は別としてこれに依てデンビー一派の沒落となり、次でハーディングの急死に遇ひ、事件の中心人物たるシ氏の信用も亦全く失墜し、一時

世間の注目を惹いた事件もあえなき終末となり、オハ油田はお蔭様で日本の手に歸する運命となつた。

八

波斯は一九〇七年八月三十一日露都に於て調印せられた英露協約により兩國間に勢力範圍が決定され、中央に東西に走る緩衝地帶を設けその北部の油田は露國、南部のは英國が支配することになつた。この協定に基き英國は一九〇九年に英波石油會社を起し一三年七月十七日には議會の協賛を得て英國政府が大株主となり現在では南部諸洲の五十萬方哩に亘る石油採掘權を確保し旺に經營してゐる。

露國は一九一六年北部ペルシヤ油田の利權を獲得し、コスタリアなるものに採掘せしむることゝしたが、翌一七年の革命で帝政廢止となり、勞農政府は內亂その他に追はれ他事を顧る暇がないのに乘じ、英國は北波斯に兵を進め、遂に一九二〇年五月二十日にコスタリアの利權を讓受した。波斯油田爭奪劇の由來は大略以上の通りである。

北波油田はコーカサス油田の延長の如き地位にあり頗る有望な世界的寶庫である。只一つ問題なのは市場に達する通路で、波斯灣へ送油することは地勢が許さないから、いやでもコーカサス經由で輸出しなければならぬ。英國がコーカサスに垂涎する所以は啻にその地の油田の價値のみではない。然るに英國が一度北波油田を掌中に收めることになると波斯は全く英國の配下に立つことになる。これは波斯の忍ぶべからざることに屬

す。又勞農政府はこれに由てコーカサスを脅かされる氣持になる。更に又米國はこれに由て石油の覇權を鮮からず浸蝕される。恁した經緯があるから問題は混亂の渦卷を捲き起すに至つた。

英國に對する挑戰の火蓋は先づ勞農政府から切られた。一九二一年二月十六日に勞農政府は波斯と條約を提結し、帝政時代に波斯から搾取した利權還附を約し、その同意なくして還附を受けた利權を他に附與しないことを波斯に約させた。勿論これは英國が前に讓受した利權を無効ならしめる底意から出たものである。これに對して英國が默つて引さがる譯がない。外務省は直ちに强硬に抗議し、新聞もこの問題に沸騰した。波斯はそれに顧慮せず一九二一年一月早々ス社と油田利權讓渡の交渉を開始した。その交渉の背後には勞農及び米國政府があつたことは勿論であるが、波斯議會は一定條件を附してス社との交渉・契約を政府に一任し、公然、而も大膽に交渉を進めた。於是、英國政府は英國の既得油田に對し利權契約提結の權利がス社に存しない旨をス社に通告し斷乎たる態度を示した。

この紛紜の起つた前年からメソポテーミア問題で英米は鎬を削り、英國はヘイティやコスタ・リカに於ける米國の石油政策迄引合に出して米國を反撥し、米國に於ては上院議員マツケラー氏の如きは英國へ石油不賣を唱へ、それに依て英國の海軍、商船、航空機に對する動力を奪ひ、以て英國を屈伏せしむべしと公言し(註一)、不戰條約で後に有名になつたケロツグ氏の如きも海外油田開發の急務、政府保護の必要を强調し、英國に對し復讐立法をなすべしとさへ主張した程(註二)兩國が熱中した所へ新たに波斯油田問題が加つたのであるから太

西洋上の氣流が極度に惡化し、暴風雨を孕むだ電流が洋の東西に走り形勢頗る急を告げ英米戰不可避論が世をさわがすに至つた。

註一。New York Herald (Paris ed.), Jan. 8, 1921.　註二。New York Times, Jan. 8, 1921.

この問題はキアツドマン氏再渡の渡米により結局英國はメソポテーミア及びパレスタインに於て讓歩し、米國も亦北波油田に英國の割込を承諾することに依て兩國の關する限りは談合がついた。然るに勞農政府の後楯とその指圖とで波斯議會は英國の割込を體よく拒絶したので交渉は停頓を來たし、ス社は焦慮を重ねてゐるところへ例のシ社が顏を出し、共和黨の後楯と黃白の力とで波斯議會を動かし、その政府をあやつり漁夫の利を占めんと試みた。米國ではフーヴアー氏が商務卿としてシ社の爲めに力瘤を入れ、勞農政府もシ社に好意を持つた結果一九二三年十二月二十日に假喫約が調印され、ス社の方は取消された。事件がこゝ迄進展した所で例のテイーポツト・ドーム疑獄事件が發き出されシ社の努力は水泡に歸した。

波斯油田問題は表面それ以上展開を見せない。その後波斯は小會社を創立して採掘に從事することになつたが、赤化と共に勞農露國の勢力が浸潤して來てゐる傾向が見える。これがこの油田の終局的運命であらうか、將た又如何なる場面の展開を見せるか、これは神のみぞ知る問題である。

九

石油の湧出する處に必ず爭奪の紛擾が沸きかへる。墨國油田は幾度か政變を惹起し、革命をさへ繰返さしめた。ジャンビー油田、ビルマ油田、印度油田、南米諸國の油田と數へ來れば限りないが、問題を持たぬものは悉無に等しい。凡そ數ある產業の中で例外なしに各國政府が關心を持ち、法制上又は行政上封鎖政策を採るものが石油をおいて他にあらうか。これは結局二十世紀に各國の興廢を決する鍵は何ぞやといふことに歸する。

資源の爭奪は近世史を飾る興味ある問題であるが、石油は新なる資源で今尙その歸結を見てゐない。而かも今後着目さるべき未開油田は極東・シペリアに殘されてゐる。「日本、汝は東亞大陸に手を觸るべからず」の禁制はニコルス・ルーズヴエルも氏を俟たずとも明確に吾人に察知せられてゐる。近時支那の我國に對する輕侮、先進國の抑壓、赤化の魔手、民族の鬪爭等を精細に觀察し、退いて默考するとき、邦家の前途寔に容易ならざるを覺える。

協調、安定、平和、軍縮、等々、その唱へるところ、その說くところ一として可ならざるはない。現世界の表面を流れ行く潮流、これに逆らへば難破すべく、これに順へば溺沈する。根底に潛む資源爭奪一切の根源を除かず、徒らに理想社會を憧憬して現實を顧ざるものは亡ぶ。適者生存は今尙眞理たるを失はぬ。潮流に乘るべし、櫂を棄つべからず。人間は樂園を夢想するを得ん、これを地上に移すを得ず。七色の虹の橋、仰いで賞すべく、踏で渡るべからず。火は熱く水は冷たい。一切平等無差別は宇宙の續く限り永劫來る時がなからう。理想は理想として永久に殘るところにその尊さがある。

（一九三一・九・六）